

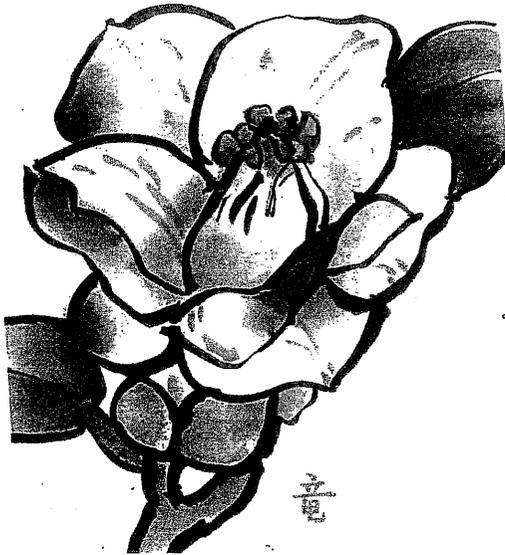
オリーブの樹

第157号

2022年3月30日

شجرة الزيتون

早期釈放！ 重刑策動をはね返し、重信さんを支えていこう！



紅椿
獄にも春日を
告げるごと
行進の先に一輪
咲き初む

目次

- P 2 冬の歌 重信房子
- P 3 独居より 重信房子
- P 11 戦士たちのリッダ闘争（4） 重信房子
- P 18 連合赤軍事件、50年に想うこと 重信房子
- P 19 「七転八倒百姓記」を読みました。 重信房子

重信房子さんを支える会

冬の歌

日本発して五十一年目の獄窓から壊れつつある世界を見つめる

ウクライナわが夢にまで侵入しスラブの友が白き手を振る

隠したい過去を問われて見上げればレナスのような春の月見ゆ

パレスチナの民と重なるウクライナの母と子供の哀しい眼に遣う

男が泣くおいおいと泣く暮れるまで同志殺しの一報知りて

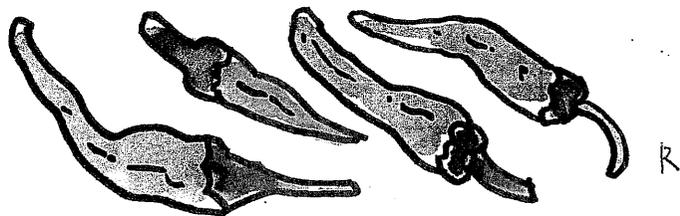
償いの数を数えつ胸底に研いだ刃は眠りておりぬ

まだ熱き骨壺抱けば音がして無口な友の嘆きのよう

新しい世界の扉開くこと畏れと好奇の新年始まる

喉仏ごくりとひとつ動かして弁解もせず去りし友あり

重信 房子



独居より 12月1日~ '22年3月1日

出所に向けてみんなの助言を大切に受け止めています。

重信 房子

12月1日 朝起きると雨。寒そう！午前中は刑務作業。昼食を12時半に終えて、居房に戻り待機。CT検査なので時間をあける必要があります。14時半すぎ、主治医が造影剤投入用の静脈への注射針を入れて待機。3時から検査棟へ。まずエコー検査。その後、胸・腹部のレントゲン。そしてCTによる腹部検査撮影。そのあと心電図の検査を行いました。結果は次回の診察時に伝えられます。

12月3日 松岡さんよりお便り『抵抗と絶望の狭間』へ重信さんの原稿掲載について高原さんや遠山家の方々や齟齬を生じさせてしまい申し訳ございません」と私にお詫びがありました。松岡さんや鹿茸社よりも、私自身が遠山家の諒解を得ず「遠山美枝子さんへの手紙」の寄稿文章を公表したことが問題を作りました。その点すでに遠山家にはお詫びしましたが、私こそお詫びしなければなりません。「抵抗と絶望の狭間」は、これから全体をじっくり読むつもりです。

ざっと中島さんの文を読んだところですが、一方的な推測に驚きました。私がアラブで大変な日々の活動の中にあって、日本の記憶が生々しく残っているとは思えないと。そうとも言えません。日本の記憶は、出国の時点までしか経験が積み上げられていないので逆に鮮明に当時が残ります。アラブの日常と別のカテゴリーだからです。また、私が「密帰国」して2年余りの自由な期間に「記憶回復作業で語った記憶の混入があります。重信さんの回復作業に協力した仲間たちの中に意識して誤った事象を刷り込ませた人がいると思います」とありますが「邪推」ですよ、と言いたいです。「自由な時間」私は、「7・6事件」などに拘泥する思考も思想状態もなく、はっきり言って、過去のそんなことに貴重な時間を使うこともありませんでした。確かに「7・6事件」によって、私は自分のこれまでの教師への道を置いて赤軍派の道に進みましたが、くわしいいきさつを当時も知らなかったし、知るよりも目の前のことに精一杯で

した。「密帰国」時赤軍派の関係者と話したり会うことなど考えにも及ばない仕事に集中していたからです。私にとっては、連赤以前に、赤軍派とは別個に進んできたので、赤軍派について考えることはなかったのです。赤軍派とか、7・6事件、連合赤軍事件については、逮捕以降の公判闘争と関わって、また、面会に来て下さる友人と（塩見さん、味岡さん、青砥さんら）話す中で、総括的にとらえつつ来ました。でも「7・6事件」について具体的に語ったのは佐藤秋雄さんだけです。彼は、昔からのお茶ノ水周辺の大学の仲間、反戦青年委員会の世話人として知っています。彼からのお便りで、秋雄さんも7・6事件の被害者と知ったのです。もちろん秋雄さんは、私が7・6事件の現場に居なかったことをもっとも良く知る人です。それで秋雄さんに、7・6事件や当時のことを書き残してほしいと頼みました。もちろん当時の赤軍派の一員として過去のことでしたが謝罪もしました。それ以外の人と「7・6事件」に関して交流はありません。

12月9日 今日はインフルエンザの予防注射をしました。

H記者から手紙で、あさま山荘50周年に関してのお便り。当時自宅近くがあさま山荘だという方から、革命の時代とはどのような時代だったのか教えてほしいとのことですが、テーマが大きすぎて語りきれないし、返事を書く発信枠がありませんので、こちらから手紙を送れません。「オリーブの樹」を読んでいただくか……。

12月15日 12月の題詠、師ですが“新しい表札掲げ師走から仕切り直しの人生始まる”これは昔1974年12月「アラブ赤軍」というそれまでのPFLP指揮下のグループから独立し「日本赤軍」の名で、自分たちの責任と対外関係のもとに活動しはじめた12月を思いうかべて一首。

ベツレヘムパレスチナの光クリスマス
師も学生も集いて灯す

12月20日 快晴の冬が続きます。ベランダに出ると肌を刺すような寒さです。今日は、年末年始の日程が伝えられました。28日迄作業・仕事納めです。31日は、TVが、夜12時15分(元旦)まで可。休み中の正月3日TV可の時間帯は10:00~11:30、13:00~15:00、18:30~20:54です。1月4日が入浴と仕事始め。新年がぐんと近づいてくる感じです。12月発行にむけて、「オリーブの樹」の校正や文を13日に送ったので、12月中に発行されると思います。

また板垣先生の「東京オリ・パラ2021とイスラム世界」の論文も丁度届いて、まず読んだところです。東京大会でこれまでどの大会でも拒まれていた1972年のミュンヘンオリンピックのイスラエル選手団の追悼・黙祷を行った背景や歴史的流れなど、分析的に論じていて、健在な先生の鋭い指摘に学びます。あの時イスラエル選手は11人死亡。他地元警察、パレスチナ戦士ら6人の死。東京大会では17人ではなく、イスラエルの選手のみを追悼だったとのこと。

読みながら、シオニスト、エマニュエルが上院の承認を得て、在日米大使に決まったニュースを思い出しています。日本の外交、とくに米国に弱い政界を操って、米国の圧力で、イスラエル支援、軍事機器、情報、経済同盟がより進みそうに要警戒です。エマニュエルの父親は、シオニストテロ機関で民族浄化をやってきた人。今の流れのままだと、板垣先生の言うように、イスラエルはユダヤ人種国家に純化(パレスチナ人をあれこれの理由で追放)をめざす右派が増々はびこりそう。それでもイスラエル内のパレスチナ人と占領下、近隣国の難民含むパレスチナ人の共通の闘いが、それに比例して益々育つでしょう。

12月22日 今日はいつになくバタバタ。工場作業を2時ころ切りあげて休憩のあと、2時半から3時半コーラス。「聖夜」を歌とハンドベルで楽しみ、「ジングルベル」「花は咲く」を歌いました。チャイコフスキーの「トロイカ」という名曲をピアニストが弾いて下さって、クリスマスパーティーのコーラスは終了。

居居棟に戻り作業終了の点呼後、診察。この間CT、エコー、レントゲン、血液検査などの結果を主治医が説明して下さい、4時15分ころ房に戻る。

今日は週一回のベッドメイク交換の日で、日用品、購入品も今日配布で房内はシーツや日用品が大量にベッドとターンテーブルに。そこに夕食が運ばれて、作業着から居室着(パジャマの作業衣)だけとりかえて夕食。それからベッドメイクや整理や、まだあった……官本配給7冊(2週間に5冊だが、年末年始で3週間分7冊)共、文庫本を狙ったのに(ロッカーにスペースがないため)外れで、全部ハードカバーの分厚い本が7冊。新聞も読めないで整理していたら、もうNHK7時のニュースが半分終わっています。

手紙も仕上げねばと。そこに届いていた資料や本、人民新聞も受け取りました。パレスチナ関連資料も届きました。PFLP12月の創建記念に「PFLPの発足から54年、PFLPの創設から現在までの知的および政治的發展」の論文もあります。これは時間をみて読みたいです。

資料の中から、レバノンのデイリースター(レバノン最古の英字新聞)が廃刊されたのを知りました。私たちがベイルートでとっていた新聞。内戦前のベイルートに到着した71年には、ちゃんと日本の新聞のように早朝自宅に届く配達システムでした。デイリースター紙は、18年のレバノンのベイルート港爆発に抗議し、ニュースを載せず紙面を黒く塗りつぶして「レバノンよ、手遅れになるまえにたちあがれ!」とレバノン杉(レバノンの象徴)の写真を掲げるのみでした。1952年からアラブ世界初だったらしい英字のデイリースターまで廃刊されるとは……。レバノン再建のむずかしさがわかります。

12月28日 仕事納め。朝、今年最後の手紙を発信しました。工場器材をチェックし、破れた布を廃棄したり、手袋や普段使わないものを洗ったりと昨日の大掃除の続きを終業前2時40分から3時まで。今日午前中は今年最後のベランダへ。寒い。霜も凍って北側のベランダは陽が射さず、今日の最低気温のマイナス2度位。手や耳がじんと痛みつつ、それでも30分の外気は気持ちが良い。

「週刊文春」12/30・1/6 合併号が届きました。年末特集盛り沢山の中、まず島崎さんの労作「ジュリーがいた」だけ読みました。「たった一人のライバル」とショーケンのこと。私には知らないことばかり。アラブに居た時代のアングラの勢いを読んでいます。週刊誌も出所前学習でいろいろ知

らないことを吸収しようと、もっと読みたいのですが。でも頭脳の劣化は読むはしから記憶にならない。

レバノン大使のオンライン報告によると、繁華街ハマラ通りは真っ暗。ガザの通電8時間、レバノンはその半分。内戦当時の方がまだとのこと。デモも宗派コミュニティにデモも吸収されて今はなく。それでも中東唯一のフリーダム発言を誇るジャーナリストは健在のベイルート。中産階級はすっぱり出国してしまつたらしい……。米欧に呼応できる金権国家が栄えている今の中東。必ず破局がくるでしょう。人々の力が戦略をもって闘えるかどうか……。まだまだ中東世界は厳しい状態が続くそうです。

22年1月元旦 2022年新年の挨拶を申し上げます。あれほど先の長かった満期出所の日がもう今年の5月28日に迫っています。友人たちの励ましや支援によって、今日まで生きてこれたとしみじみ感じています。友人・弁護士・家族にまずお礼申し上げます。

世界は様々な意味で、益々住み難くなっていると去年をふり返り、今年の国際政治の流れを見つめているところです。「民主主義」の名でフロンティアがなくなるほど新自由主義の市場化を推し進め、格差を極限まで国際国内的に作りだした米国。今度は「民主主義」対「専制・権威主義」という二項対立で、中・ロに対決しつつ、その一方で米国の下に他の資本主義国の統合を企んでいます。バイデンの「民主主義」はトランプ政権と同じ「米第一主義」の衣装のようです。

新年米国の覇権主義は政治・軍事・経済へと強化され、戦時体制集団安保が再編されつつあるようです。欧州中東ではイスラエル・米国中心の布陣で対イラン戦略のもとで10月には米・英・仏・独がイスラエルのネグブで空軍の合同軍事演習し、UAE空軍司令官も参加。11月には紅海上で米・UAE・バーレーンの海軍合同軍事演習。対ロ戦略ではウクライナまでNATOの陣型強化を狙っています。アジアではQUAで対中国対北朝鮮集団安保の布陣をひき、10月には米・日・オーストラリア・インド・英・オランダなどで共同演習と。

俯瞰的にみるとアジア太平洋と中東の動きを米国は一つの流れとして把握しつつ、実戦的演習を行っているようです。AUKS中心のバイデンで

す。これが「民主主義」の骨格なのでしょう。中東では軍事安保は対イラン戦略として米・イスラエル中心にUAEをまきこみ、経済的にはイスラエル・UAEイニシアチブで中東の新自由主義市場化を大胆にすすめ、その桎梏となる政治をUAEが中心となって再編中です。イスラエル・UAEの戦略同盟は「アブラハム合意」以前は米国を仲介して蓄積していたものが、合意以降一挙に早いスピードで広がっています。産油国は富の偏在にかつては分配義務を負いつつ民族主義政権の意向に従っていましたが、今では財力を武器に従わせるといった行動がレバノンや他の国々に対しても目立ちます。

イスラエルはアラブ世界にUAE・モロッコ・バーレーンなどと足掛かりをつけ、ベネット首相はUAEを12月12日に訪問するなど、パレスチナの犠牲と弾圧の上に築いています。パレスチナに対する、とくに東エルサレムの住民に対する人権無視の弾圧は、12月10日国連総会で6つものイスラエル非難、パレスチナ支援決議を生んでいることに示されています。①東エルサレム聖地モガダスでの入植地建設非難②シリアのゴラン高原の占領非難③UNRUWAへの支持④ガザ地区の全面的な封鎖解除⑤占領下の入植地建設とその地の住民に対する挑発・逮捕・住宅破壊の非難⑥パレスチナ人の難民の帰還の権利、が総会決議されました。今でも4659人が拘束され(12/1現在)ています。うち児童180人、女性31人。パチュレ人権高等弁務官は「およそ400万人の人々が深刻な権利侵害に晒されていることにより、パレスチナ被占領地における人権状況は悲惨なものとなっている」と述べています。

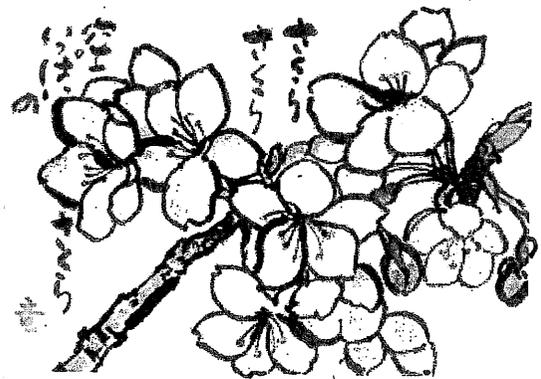
日本は安倍政権になって、かつての自民党政権と違ってイスラエルと戦略的な同盟関係をつくりあげ、パレスチナに敵対しています。また、自公政権はバイデン政権に乗って防衛力を高め、予算を増大させ戦時安保集団体制づくりへと一挙的に進めています。安倍政権を引き継いだ岸田政権は「新しい資本主義」などと目眩ましのキャッチフレーズで「トリクルダウン路線」を目先の手直しで続け、独占企業優先を変えようとしません。森友、財務省改ざん問題、学術会議問題も安倍・菅路線と変わりません。反対に「赤木裁判」に「認諾」などと称して、税金を使って公然と真相隠蔽を図ったところにその不誠実な本質が示されまし

た。一刻も早く安倍・菅路線を終わらせるために野党共闘をもう一度検証強化してほしいと願っています。今年の参院選は共闘を前回よりも前進させるのは政党より市民の力です。

私は何よりも学ぶこと。社会復帰に向けていくつも助言や要請をすでに受けて学習中です。これまでの社会参加の欠如を学び補い、リハビリを第一にと考えています。能力・体力・時間的に何も出来ることはありません。でもあるがままの自分で好奇心と共に一步一步学び、感謝し、謝罪し友人たち未知の人々とも出会いたいと思っています。これからはみんなの助言・教示を大切に、まず出所を目指します。今日はみんなから午前、今夜8時とたくさんの賀状を頂き、励まし再会のお便りの言葉に、なにか温かく嬉しい元旦を過しています。快晴で明けた昭島の新年です。

1月4日 今日から仕事始めです。工場作業も楽しみつつ参加。ベランダの久しぶりの外気は年末の凍った霜の日よりもやわらかい寒さです。去年、送って下さった資料や、「オリーブの樹」などの交付物は、まだ職員も仕事始めて多忙かで届きませんでした。Tさんのお便り、去年末のもの届きました。「2月27日には、連赤戦士たちの埋葬された群馬県・旧倉洲村で法要があります。曹洞宗・全透院（碑を建立してくれた）は、一時無住になっていたものの、今は後任の住職がいるとのこと」と記されています。追悼法要が行われる50周年です。

1月6日 四方田先生からのお便り。昨年9月から12月にかけて6回、大塚の小さな上映ホールを借りて「シオニズムとパレスチナ」という連続講義をされたとのこと。「コロナ感染の可能性



もあり、12、3人くらいいいな位に考えていたところ、何と56席の定員がいつもぎっしり満員になるほど。どの人もすごく真面目で、いろいろな経歴の人がいました。3・11で家族と家すべて流された故に、難民のことは、人ごととは思えないという人もいましたし、アラブ圏の音楽が好きだからパレスチナについて知りたいという人もいました」と。でも毎回2時間びっしり話したので、質問の時間をとれず、パレスチナについてみなひとこと言いたそうな表情だったと述べておられます。でも、パレスチナ難民二世の女性監督の作品を2人紹介出来たので、よかったと。私は、パレスチナの映画は、ガッサン・カナファーニと一緒に見たカナファーニ作品の「太陽の男たち」——出稼ぎのパレスチナ難民——以来見ていない……。今年は、いくつも見ることがありそうです。

今日は雪の予報で暗い空でした。11時25分ころから30分ベランダで毎日晴天の日は運動です。運動を20分位終えたところで粉雪が舞いはじめました。とても寒くて最高4度、最低マイナス2度の昭島。やっとな国雪というニュースと同様にこちらにも雪！運動中断。3時工場から居房に戻ると、隙間に雪が降りつもっているのが見えます。

1月13日 「本多延嘉3・14虐殺死を越えて四五年」を読みました。難しい本かとちょっと警戒しつつ読み始めて、連休中のベッド安静時間に興味深くすぐ読み終えてしまいました。45年も経て指導者として本多さんを当時の時と同じように接する人々の情愛にまず感心しました。それ程の人物として本多さんの多面的に語られるエピソードなどに、すごい人だったのだろうと実感しつつ読みました。とくに浅田光輝さんが本多さんの破防法裁判の第一回公判意見表明に「私はこの本多書記長の堂々の論に心から打たれた」と述べておられる通り「革命的共産主義者は法律を自己の行動基準とはしない。(中略)だがそれは革命的共産主義者が法律を無視するということなのではない……」の引用は、とても格調があります。人々が敬する人柄はリーダーにはやっぱり大事だと、赤軍派時代をふりかえりつつ……。また私の在アラブ時代の日本での事件、1974年4月17日の「革マル派の弁護団襲撃という一大愚行」という浅田さんの文を読んで、はじめてその呆れた襲撃を知りました。ああ、こうしたことが「連赤」以降も続

き、市民社会と革命を敵対させてきたのか……と目の当たりにその詳細を読みました。井上光治弁護団長らが重症を負われた中で、どう破防法裁判を持続させたのか、と。その一年後、本多さん虐殺……。本多さんが「内ゲバ」を越える論理を駆使していたら、と思わずにはられません。「戦略的総反攻論」しかなかったのか？と。この本にはいろいろの人が記していますが（場違いな感じの私の一文も）中でも水谷さんの文はこの45年をふり返り、組織論の欠落など、自らのあり方、本多さんも含めて自己批判的検証を試みている点で好感が持てました。

1月14日 歌人の浅川さんから新年号(1/5)の部落解放同盟中央機関紙「解放新聞」が届きました。一面一杯に浅川さんの筆「人の世に熱あれ人間に光あれ」の言葉が躍動しています！「全国水平社創立宣言」の有名な最後の一文。「表紙の書の作者紹介」で浅川さんの略歴が記されています。

歌人であり、元多武峰談山神社の神職でもあったと知りました。私よりひと回り年上ですが、いつも虐げられた人々と共に反差別・反権力の人。昨年はアイヌ民族差別に抗する巡回展を行なっています。忘れていましたが、全国水平社創立100年になる今年です。

1月16日 送られたパレスチナ関連資料を読みつつ、益々パレスチナ民族浄化を深めるイスラエル政府とユダヤ人入植者たちの暴挙を知ります。2021年の間にイスラエル軍は950のパレスチナ人住宅や施設を取り壊し、東エルサレムを含む占領下の西岸地区に15の入植開拓地を建設した(土地調査センターが12/29に発表)。950を取り壊して24,750ドゥヌム(1ドゥヌムは1000㎡相当)の土地を没収したという。入植者らは17,740本の木を切り倒し傷つけ、55の入植地は拡張を行なった。イスラエル当局は2021年100以上の入植地計画を発表しており、入植者向けサービスや軍のために約25の新たな植民用バイパス道路や支線道路を設けた。さらに「ピースナウ」によると、東エルサレムを含む西岸地区の145の大規模入植地と他に政府の認可を受けていない140の整備不十分な開拓地を含めると666,000人の入植者が占領地に移住しているという。エルサレムの自治体は更な

る入植地をつくり、エルサレムのユダヤ化を進めている。アラブ的アイデンティティを塗りかえ、エルサレムと西岸地区の連絡を妨害する入植地ベルトをエルサレム市周囲に設立するために、新規入植地を2022年から着手することを承認。丁度届いたオリーブの会通信に「フェイスブックのオリーブの会のページに対するブロック、削除の脅しに抗議する」と声明が載っています。ハマスの軍事演習ニュース記事の翻訳に対してです。フェイスブックは明確にイスラエルの立場からとらえており、トランプ政権で中東の地図からパレスチナを消して以来、不当なフェイスブック、グーグルなどの動きが強まっているようです。

1月24日 今日は辺野古の名護市長選で、オール沖縄が、勝つことが出来ず、とっても残念です。投票率の低さに、非政治化の傾向を感じます。国家権力の沖縄県民無視の辺野古移転ごり押しに、どうせ方針が変わらないのなら、金をもらって住民生活の向上に活かした方がいいというのが、特に若い人々の「合理的考え」なのでしょう。これは沖縄に限らず、庶民程「ジェントリフィケーション」によって非政治的に「快適化」を求めているのかもしれないと思います。新自由主義の人間も自然も商品化しつつした世界の文明観が、人間の良心よりも(それはしばしば通用しないから)今より自分にとってベターなことなら、まあいいか……という消極的保守なのか。沖縄県民にだけ良心を求めて応援する自分たちに自己矛盾も湧きます。でも、デニーさんに勝利を！

「連合赤軍 革命のおわり革命のはじまり」(月曜社発行)が、送られてきました。「文春」「解放1234号」「かりはゆく」「アジア新時代と日本」それに「情況」2022年冬号が届きました。特集「連合赤軍半世紀後の総括」です。私の文も「時代の証言—森指導部との訣別」として載っています。これは「赤軍派時代とわたし」の原稿から、70年12月～71年2月の部分を編集部が抄録したものです。「連合赤軍特集」に使うとのことと誤解しました。まだ全部うけとって読みきれませんが、「赤軍派高校生の証言—7・6明大和泉校舎事件」、大谷行雄さんの一文に、読んでひとこと記さねば、と思いました。

大谷さんは、7・6事件で医科歯科大515教室でいっしょにやられた当時の高校生であり、大下

さんの逝去の追悼の文などで、交流の機会がありました。今回この一文で、当時のことを知りました。とても素直な一文です。7・6の日、K君やMさんのリーダーシップのもと、「高安闘委」の委員長だった大谷さんが7月5日に数十人を集めたようです。Mさんは当時女性のリーダーで、のちに私も親しくなりましたが、7・6和泉でのことを悔いでいました。とても積極的に関わったようでした。

大谷さんの一文が私に刺さりました。「ただ、ここで声を大きくして断固抗議したいことがあります。」当時その場にいた堂山道生が「自分たちリーダーが悪いんだが、今日の明け方の決起集会で、塩見が反対派の腕の一本や二本折って、云々と言って景気づけやった。それを真に受けた高校生がメチャクチャ手を出した。ワシらも手を出さないと格好つかん、と手を出した……(野次馬雑誌ブログ掲載重信房子「独居より」二〇一七年七月六日)と公言していることです。そしてそれがいつの間にか通説となり流布されていることが納得できません」と記し、くわしく当時の現場の様子も記しています。塩見さんが論争糾弾自己批判迫るも、仏さんは断固拒否していたそうです。高校生部隊が外で待たされ花園さんか田宮さんから「どうしても我々の要求が呑めんらしい。お前らもやれ」というので部屋に入ると、すでに仏さんの顔は膨れあがっていたとのことです。命令に、女高生は半べソ震えながら殴っているのを見かねて「足くらい折ってやれ」と檄というか命令口調で仏の足を別の椅子に置いたので仕方なく小生が体重をかけて折ってしまったのです。勿論あんなことは生まれて初めてですし、それが私の逮捕につながったと思うと、その後の罪悪感はいつまでも消えませんでした。」と記して、堂山発言は正しくなく、指導部が命令したこと、この体質が後の連赤での仲間の死に至らしめたかもしれない、今は思っていると述べています。

私は、読んで、当時もこれまでも、堂山さんの発言を真に受けていました。改めて、目を開かされてふりかえれば、そういえば、あの和泉校舎で何がどう始まり起こったのか？ リーダーたちからその後具体的に聞いた記憶がありません。大変な時で、多忙でまた大雑把な人たちだからと、とくに私もくわしくは聞きませんでした。「実践的検証」は一度も行われたことはありませんでした。

そんな余裕はなかったのです。大谷さんの言うのが事実だろうと改めて思います。

2月4日 立春です。TVでは大雪情報を告げています。また夜には北京の冬季オリンピック開会式が始まるとのこと。受けとった救援紙一部抹消の上交付されました。抹消されていたのは和光さんの年頭コメントのところでした。何がひっかかったのでしょうか。

今日「色紙2枚と毛筆ペンは使用禁止のため送り返そうとしたが、費用がかかるためとりやめたが、領置されるが廃棄か宅下げにするように」と担当官から通知を受けました。後に受けとった手紙で事情が分かりました。若く静岡での空港建設反対など活動した後、商社で働きベトナムやカンボジアを訪問し、のちにカンボジア人妻と起業して貿易商社を営んでいる人が「弊社へのエールの短歌を別送する色紙に直筆でいただけないでしょうか。弊社から謝礼をお振込させていただきます」とあります。ちょっと唐突な依頼ですが、略歴も送られていて、自分の思うように生きている人で、アジア・パレスチナも射程にした貿易を目指している人だとわかりました。でも、第一に色紙などは禁止で交付されませんし、第二に私は短歌を知らない会社への応援歌として詠むことは出来ません。長い手紙を頂いたのですが、協力は出来ないとお知らせしたいところです。時々知らない方からお便りを頂きますが、こうした短歌の依頼は初めてです。でもこの方の略歴はとても自由な生き方をしておられます。若い人が「遊ぶ」大切さを広げてほしいと思いつつ読みました。

2月10日 立春が過ぎると、春が心の中に広がります。何だかせかさされる2月です。都心は雪。こちらはみぞれ、そして少し雪解して雨です。

「オリーブの会通信」のPFLPのHPからの記事に「同志であり、創設時のリーダーであるアブ・マヘルの旅立ちの記念日」という彼の業績と略歴の載っているのを読みました。なつかしい同志。

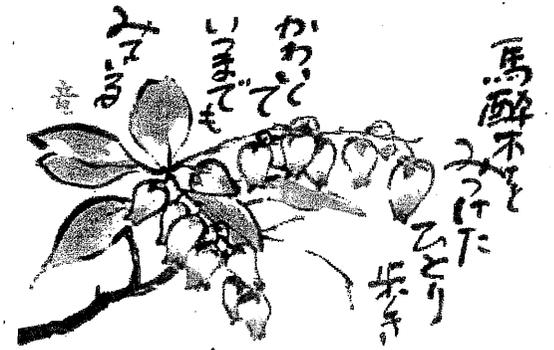
1924年生まれ、反シオニズム闘争の最前線ですと闘い、「ガリラヤ旅団」を結成し、1948年ガリラヤ市陥落後もパレスチナを去ることを拒み、イスラエル当局によってレバノンに強制追放(1949年1月31日)。以降は、レバノンを中心に難民キャンプの教師、校長など民衆運動で他の

組織含め、もっとも尊敬された人。レバノンでも55回も逮捕されつつ、アラブ民族主義運動(ANM)創設をハバシユ、ハダードらと担い、2011年1月4日永眠。その間PLO執行委員など、あらゆる場で献身的だった人。

いつも私たちが様々に助けてくれた。ある日ベイルートアメリカン大学に講演に来て、メイをみつけて挨拶を交わして、「え?! 何でアブ・マヘル知ってるの!」と、特にパレスチナ人学友に聴かれて、身元を隠しているメイが困ったと言ったことが思い出されます。数少ない、メイを知る一人で、何かあったら彼に相談するよにと、メイに言ったことのあるマヘルおじさんでした。なつかしく読みました。

2月14日 今日は、CV ポートの器具を鎖骨下から抜去する手術。刑務作業は本日休みです。10時前に上半身手術着に着替え手術の病棟へ、車椅子で移動。その後、スムーズに局所麻酔から抜去。30分位で終了。居室に戻り安静。痛み止めと感染予防の薬を服用し、昼、夕食も、平常のように食べることも出来て、問題ありません。唯、こうして書いていると、右鎖骨下の傷口に響いて痛いですが。

丁度、金平さんの「筑紫哲也『NEWS23』とその時代」の本を読み終えたところです。18年以上続いたこの番組を筑紫さんは癌で降りののですが、最後の「多事争論」で「ひとつの方向に流れやすいこの国で少数派であることを恐れないこと、多様な意見立場を登場させることで、この社会に自由の気風を保つこと」を実践してきたことを語っています。そして18年続いた理由は、視聴者からの信頼というのが大きかったとのべています。筑紫さんは、金平さんが継承しこのDNAを金平体制としていくことを望んでいたようです。筑紫さんより鋭敏にTBS内を批判したせいか、米国に飛ばされて現場を奪われた金平さん。その後、「報道特集」に返り咲いて当時のDNA、①WATCH DOG②MINORITY③DIVERSITYにもとづくジャーナリズムを続けています。自由な報道の黄金時代をふり返る時、現在の閉塞をつくった安倍政権モリカケ改ざんへの金平さんの批判は鋭い。私の日本不在の時代の日本のメディアの闘いを学びつつ村度の現実、会社員化したジャーナリストの現在の落差をかみしめています。



デジカメ歌人の「春よ、来い」の立春のお便り。写真は信じられない程満艦飾の花一杯の庭。日付は2月3日なのに、パンジー、バラ、梅その他花ざかり。今朝起きたら隣の建物に雪が残っています。こんな春花盛りの写真うれしい! 写真立てに飾っています。

2月18日 「プチの大通り130号」受け取りました。編集長のNさん入院中とのこと、快癒を祈ります。智子先生の今年一月の歌は“甘えくるプチたしなめて冬ヒバリ雲に届くまでを見し”今年は何百一才? お元気なのは私たちの励みです。楽しく読みました。

2月21日 「ヤフーニュース」の産経新聞2/11記事読みました。警視庁HPなどで国際手配中の「日本赤軍メンバー」の動画、現在の年齢を想定した似顔絵などがアップされているようです。予算対策か。

「フォーリン・アフェアーズ」2月号も受け取りました。ウクライナ情勢もそれに論文が載っています。アンジェラ・ステント著「ウクライナ危機の本質」でロシアは「戦略的曖昧性」を駆使して近隣を不安に陥れている。「ミンスク合意」を見直して、米国も関与を強めるべきと提言しています。米欧はゴルバチョフ時代にブッシュ父やコール独首相らはNATOの東方拡大はしないと明言していました。また2015年のミンスク合意でドネツク人民共和国・ルガンスク人民共和国に大きな自治権を与える憲法改正を、ロシア軍のドンバスから撤退を実行することとリンカーンさせましたが、ロシアを利すると頓挫したまま。「ロシアとウクライナの歴史的一体性」を主張するプーチンはクリミア編入以降その立場は一貫しているし、そういう歴史的な特殊な条件もあります。引くことはあ

りえないでしょう。また米欧も戦争を避けたい分ずっと何年も局地戦は激化してきました。中東での戦略バランスを転換した「シリア支援」のようなプーチンの「戦略的思考」は新たな段階の動きを始める気なのかもしれません。何よりもウクライナの一般市民の犠牲の拡大が危惧されます。

2月22日 夜のニュースでプーチンがドネツク、ルガンスク両人民共和国の独立を承認する大統領令に署名したとのこと。平和維持の名でロシアは駐留中の軍を正当化し、米欧は厳しく経済制裁を続けるでしょう。イスラエルの占領に合法性を与えている米政権の正義をかざす御都合主義ばかりが私には感じられるウクライナ問題です。

2月25日 新聞の一面には、「ロシア・ウクライナ侵攻」「主要都市、軍事施設を空爆」「米欧は非難・制裁強化へ」と戦争を伝えています。ロシアのプーチン大統領は、世界を敵にまわす覚悟で戦争を始めたので、かなり世界が変わるでしょう。プーチンは、シリア内戦に「ゲームチェンジャー」として介入し、アサド政権支援は思惑通り進みました。それは、シリアに対する西欧報道の偏向とちがってアサド政権は、シリア国民の多数の支持があり、アサド政権のそれを基盤とする意志と力があつたからです。でも今回の決断は、プーチン政権の崩壊の始まりでは？ 軍事的に勝っても長期的には崩壊へと向かうと考えられます。プーチンは核抑止力をもつロシアに NATO は介入できないと見ているようですが、逆に、ウクライナ人に闘わせる NATO の武器供与の軍事介入で局地戦は激しくならざるを得ません。プーチンは、米欧勢力、特に米政権の詐欺的な振るまいに「戦略的決断」として、戦争で政治目標を獲得するつもりでしょう。米、NATO のロシアへの歴史的配慮の欠如が問題をつくり出して来たのも事実です。ゴルバチョフ時代に、ブッシュ父と、ドイツのコール首都相は、NATO の東方拡大は行わない東西和解の意向を示してきました。ところが、クリントンが政権につくと、東欧・ソ連移民の支持票に応えようと、NATO の東方拡大がはじまり次々とその後も行いました。とくに民主党オバマ政権のヌーランド國務次官補らは、ロシア帝国時代からの移民の人脈が深く、彼女はネオコンの理論家、ロバート・ケーガンの妻でもあり、反ソから反プ

ーチンへと、90年代から國務省中心にウクライナ政変を企て、政治工作をくり返してきました。ヌーランドらは、ロシアとウクライナの歴史的関係を利用して逆に対決させようとしてきました。そしてまた、「ロシアとの和解」を訴えて登場したユダヤ系のコメディアン出身のゼレンスキー大統領が招いた戦争とも言えます。戦略的に戦争の「レッドライン」を見据えて、「ミンスク合意」から主導的に東西に対する非同盟を宣言し、一気に経済復興を目指せたのに、ヌーランドらの支援で「ミンスク合意」を拒み、ずるずるとロシアとの対決へと進みました。プーチンの側から見れば約束反古の挑発です。権威主義者プーチンは、軍事的に制圧した上でウクライナを昔のように少なくとも中立化させたいのですが、結局ヌーランドら歴史的反共・反ソのネオコンを含む勢力の挑発の沼にひきずり込まれたとみえます。メディア戦争も激化するでしょう。結局犠牲は、ウクライナとロシアの人々に及ぶこととなります。即時の戦争停止は、なかなかむずかしいと思われます……。

2月28日 今日は、あさま山荘の闘いが終わった日です。昨日の朝日新聞に、当時の検事で、青砥さんの取り調べを担当し、今は弁護士の古畑恒雄さんの話が載っていました。その中で、検察庁・法務省は、法律ではなく「内部通達」による運用で、無期刑を密かに終身刑化していることを批判しています。ひとつは1998年の最高検次長検事名で出された「マル特無期通達」と呼ばれる検察官が「動機や結果が死刑事件に準ずる位悪質と判断したら『マル特事件』として、他の無期囚より長期に服役させる」というものです。もうひとつは、2009年の法務省保護局長通達で、「無期受刑者の仮釈放審理にあたって検察官と被害者等から面接調査すること」を定めたことと、仮釈放を限りなく不可能にする通達だと批判しています。検察の「正義」の独占の姿を改めて思いました。

今日は、日本を発って私がアラブに向かった日。もう51年です。当時のいきいきとした社会の雰囲気甦ります。”日本発ちて五十一年目の獄窓から壊れつつある世界を見つめる”と一首零れます。

昔の友人も逝去される方が、多くなりました。丁度、Tさんよりお便り。「祝誕生日」を送れませんでした。元気に地域の活性化・高齢者の楽しい環境作りに励んでおられます。施設利用の男女

比率は一对九または二対八で圧倒的に女性参加者が多いとのこと、へーそんなに?! とお便りを読みました。私の五月出所を、期待を込めて健康を気遣って下さっています。現愚研を思い出します。もう55年も昔。また、小中学時代の友人たちも元氣との便りに、出所したらMちゃんやKちゃんと一緒にバイオリン奏者となっている小学校の友だちのコンサートに行こうと思っています。

2月28日、日本を発って51年目に、パレスチナと共に、学生時代の旧友をふりかえています。

戦士たちのリッド闘争 (4)

重信 房子

7 決断

予想外のオリドの事故死で事態は大きく変化した。作戦準備が始まろうとしていた。

オリドの遺体を帰国させた後のことだった。ユセフが渋々ではあれ帰国する前後だったと思う。BBC放送で、日本で銃撃戦が闘われていると報道された。バーシムが訪ねて来て、二人でラジオを聞きながら、「軽井沢」という地名に違和感を持った。霞ヶ関占拠ではないのか？と。それでも決別した仲間がやっぱり闘っていると嬉しかった。バーシムと私が71年2月末に日本を出発してからもうすぐ一年になる2月のことである。バーシムはサラハと話し合い、アブハニに、オリドの水死のことがイスラエル側に掴まれる前に、自分たちが調査を担った作戦を急ぐことを提案した。アブハニたちにとってもそれは喜ばしい変更提案だったに違いない。

この提案を伝えた後、バーシムとサラハはシリアのパルミラへ旅行することにした。オリドとユセフの四人で2月に予定していた旅だった。私が引っ越して来た新しいアパートにバーシムが来て「パルミラに行ってくる。あなたは行かないでしょう？ 年末か年始にちょうどパルミラから帰って来たところだから」と笑った。日本から年末からバイルートを訪問していた女友達がパルベックとパルミラをぜひ廻りたい。もし私が一緒に行けないなら行かない、と言う。せっかく歌手業の休暇をやりくりして訪問した友達のために数日付き合うのも楽しいだろうとバーシムに事情を話して観光して来た。パルミラの人の居ない廃墟のような遺跡から風と共に群集がうごめく錯覚を

3月1日 ウクライナ情勢は27日、プーチンは核兵器による「特別態勢」をとるよう命令したとか。プーチンのウクライナに対する「非軍事化中立化要求」は、戦争によって正当性を損なってしまいました。今、NATO が戦争にふみきれば核が使用されるでしょう。ロシア軍は、NATO の総力戦には勝てないでしょうし。暴力による支配と「解決」の道は「反テロ戦争」が導いたパラダイム。人民おきざりの国家間戦争の厳しい時代を迎えました。

何度か感じた。それは明け方のうちにホテルを出て、アゴラ（広場）の劇場の観客席の石段に座っていた時だ。砂漠の地平線から太陽の光がまたたく間に届くそんな夜明けの時だった。荘厳な歴史の中の小さな小さな自分を知ることができる。またサラハから、「僕らはマリヤンみたいなヘマはしませんよ」と冷やかされた。私と友人がパルミラのあちこちに落ちている遺跡の小さな破片を持ち帰り、Dさんの友人の骨董美術商に見せたら、笑われたのを話したからだった。それは生活用品として使っている素焼きの水瓶の破片に過ぎなかったのだ。

この2月に、パルミラでオリドとユセフと共に降る星空、全方位地平線の視界を味わうはずだったバーシムとサラハは二人で出かけた。

パルミラの遺跡が欧州に伝えられたのはヨーロッパから来た商人が17世紀に初めて見、その壮大さを告げたことに始まるらしい。

世界最古の都市といわれるダマスカス同様、古代文明開闢以来この地域に生まれた都市の一つだったのだろう。パルミラはシルクロードにもつながる隊商・通商都市国家として栄えた。ダマスカスから250kmほど北東に位置する。紀元前270年頃のパルミラの女王ゼノビアの時代が最も繁栄した時代であつたらしい。夫をローマの差し金で親族に殺されて女王として立ったゼノビアは、ローマからの従属強要を拒み、挑戦し闘いそして敗北した。女王ゼノビアが捕虜としてローマに連れ去られて以降、隊商・通商都市国家として栄えたパルミラも滅亡へと向かう。ゼノビアの勇敢さと悲劇はシリア人の誇りでもある。キリスト教に

帰依した最初のローマ皇帝コンスタンチヌスによってパルミラの信仰の中心であったバアル神殿が破壊され、巡礼が禁止されたのはゼノビア女王の敗北から半世紀ほど後のことになる。パルミラもバールベック同様バアル神の大神殿があり、春にはフェニキアの「アドニス祭」の巡礼がきらびやかに行われてきたが、キリスト教支配に抑圧されパルミラも滅亡していった。

2月末、雪の残るバールベックのベカー高原からいったんダマスカスへと南下し、そこから北東のパルミラへ向かうことにしたとサラハに聞いた。「オリードが話していた世界最古の町ダマスカスの、今も続くスーク（市場）とその中心にある有名なウマイヤードモスク、そこにあるヨハネの墓というのを見てみたい。またオリードが行きたいと話していたダマスカスの郊外にある、人類の争いの始まりといわれるカインがアベルを殺したといわれるカシオン山にも登ってみるつもりだ。オリードの写真も連れて一緒に行く。4、5日の旅だと思ふ」と言っていた。

後に会うと、「パルミラはこれまで見た数少ない遺跡の中でやはり一番圧巻だった」と二人とも口を揃えて話していた。岩山の絶壁の頂上に古い遺跡があって、そこは崩壊の危険があると立入禁止地区なのだが、バーシムたちは交渉し、少し金を払ってつぺんまで登ったという。「すごいー望！ 見渡す限り砂漠の真ん中に忽然と現れたパルミラの街。中心部にナツメヤシの木とオアシスがあるその全景は見応えがあったなあ……とくに明け方の地平線から昇る日の出はやっぱりすごい」と感動していた。サラハが言うには、オリードの写真をそこらに埋めようと思ったけど、歴

史の塵になる人類の流れに圧倒されてそれもしなかった。陽炎のようにラクダや馬に乗った大群が現れる錯覚も幻視したという。アゴラに座ってオリードにもユセフにも見せたかったなあとバーシムと話していたんだとサラハが話していた。

それから数日して岡本公三さんがベイルートに到着した。前後して届いたユセフの報告によると、ユセフが帰国し、作戦要員として考えていた仲間たちは、ちょうど起こった京都での「爆発物取り締まり」を口実にした捜査弾圧で散ったり隠れたりしてしまっただけという。ユセフの目論見が成り立たなくなった。「ボクらの『置きみやげ』も影響しとるかもしれん」とサラハは言う。ユセフが帰国する頃は、日本からのニュースは浅間山銃撃戦が続いていた。が、京都での弾圧の次には連合赤軍の粛清、仲間殺しのニュースが日本中に衝撃を与えていて、誰も驚きでユセフの話どころではないらしい。京都でのフレームアップ弾圧と「連合赤軍事件」は各方面に衝撃を与え、アラブへの人材派遣に応じる雰囲気は一挙に萎んだ。それでもユセフはもともと出国を希望して来た岡本さんを送り出している。

私は70年8月に日本で岡本さんに会ったことがある。赤軍派は「よど号作戦」以降のそれまで類をみない「赤軍派弾圧」の中で闘いが困難に追い込まれていた。でも「よど号作戦」以降、若い志願者は赤軍派に期待を寄せて集まっていた。しかし何の準備もできない中で、70年7月頃の拡大中央委員会で、70年「秋の蜂起」を下ろして「連続蜂起路線」に変更した。つまり、大きな蜂起を闘う条件はできておらず、主体の準備条件に合わせて連続的に戦闘を準備するという、いわばなし崩し的な辻褄合わせのような転換とも言えた。この会議は堂山道生さんのリーダーシップのもとで決定されたが、イメージとしてはゲリラ戦だったと思う。この路線転換を各地に伝え、意志一致するためにまず大衆戦線（革命戦線）の数人の責任者が全国に派遣された。次に軍事委員会がその後継に続いて人材を組織する。最後に私たち兵站財政部門の担当がカンパに回るという計画が立てられた。そのスケジュールに基づいて私とTさんと8月九州を回った。福岡、長崎、熊本を経てカンパを受けつつ鹿児島大学に入った。どこの大学にも先行して来ているはずの革命戦線も軍事委員会も来ていず、私たちが初めての「路線転換」の説

明役となった。どこでも驚かれ、「赤軍派らしくない」と批判されてきた。鹿児島大学でも私たちが到着すると、赤軍派系の学生たちとの会議が始まった。私が「秋の蜂起」路線から「連続蜂起」路線への転換を告げると、やはりここでも初耳らしかった。真ん中にいた童顔の小柄な青年が、突然私の話を遮って言った。「連続蜂起なんて、蜂起の放棄じゃないか！ 兄貴をどうしてくれる！ 何が赤軍だ！ 世界赤軍を目指して来たのに！」と激しく糾弾する怒りの抗議が震えていた。

「おかもつっあん」と呼ばれたこの青年は「よど号作戦」で朝鮮に行った岡本武さんの弟だとその時他の仲間が教えてくれた。弟は赤軍派には属していないという。私はこれまでいろいろの大学を回ったが、反対意見が多いことを告げ、「現実的には力量が足りないんです。反対の人は意見書を書いてほしい。中央委員会に提起します」などと訴えた。この時この岡本青年が兄のもとに行きたいこと、兄同様世界で闘いたいことを述べていた。私は機会があったら連絡すると別れた。東京に戻って革命戦線も軍事委員会も九州を回っていないと告げると、蜂起の放棄路線は空気も入らず、また交通費もなく行けなかったと弁解されてしまった。アラブの私たちが赤軍派と決別して以降、あの青年岡本公三は「赤軍—PFLP・世界革命宣言」の上映運動に加わり、海外に行きたいという思いを述べていることも知った。私はバーシムと「岡本青年の希望する訓練の後、PFLPの協力を得て、彼によど号グループとのコンタクトを頼もう」と話合った。岡本さんは鹿児島で初めて会ってから約一年半後、3月上旬だったか、ベイルートに到着した。

その前後の3月8日か9日頃、ベイルートの私たちに「連合赤軍による同志殺害」のニュースが入った。

連合赤軍事件のニュースは、アルハダブ事務所に入った一本の日本からの国際電話で知った。「『3時のあなた』という番組の山口淑子と申します。赤軍派が仲間を殺しました。ご存知でしょうか。山田孝さんという方が殺されました。お知り合いでしょうか。あなたのご意見を聞かせて下さい」と言う。たたみかけるような一報と質問だった。何か、森指導部のためにとんでもないことが起こってしまった！と直感した。山田さんが殺されるなんて異常以外の何ものでもない。私はバ

ーシムに泣きながらそれを伝えた。「スパイと間違えて殺されたかも知れないじゃないか」とバーシムは私を慰めた。そんなことはありえない。森さんのせいだ、と私は主張した。この一報から何日かを経て、今度は私の親友の遠山美枝子さんを含む十人くらいが殺されことを知った。もう涙も出ない。泣けなかったし驚きと憤りは、逆に私を冷静にさせた。

この多くの同志の死の事実を告げると、バーシムは驚愕し今度は彼が泣き崩れた。私たちはパレスチナでたくさんの同志愛を見てきた。家族まるごとのパレスチナ解放の愛を見てきた。どうして?! バーシムは呆然として傍らの本を取り上げると号泣を押し留めるように同じ箇所を何度も何十回もくり返し読み続けた。「隊伍を整えなさい。隊伍とは仲間であります。仲間でない隊伍がうまくいくはずがないではありませんか。我々は隊伍を整えた。全軍は91人と72丁の銃を残すのみとなった。多くの者が失われたが、残った者はどのような困難と欠乏にも耐えうる革命の志に結ばれた一心同体の仲間のみであった」（これは雑誌『映画批評』に載った竹中労の「毛沢東青春残侠传」の中国革命の長征時の一節である）この一節を泣きながらバーシムはくり返し暗くなるまで何百回読んだだろう。私たちには起こった事態はわからないが、同志愛と革命が不可分であることを国内に闘いで示し伝えようと誓い合った。

この衝撃的なニュースの後で、バーシムが私を呼び出して言った。「実は退路を断った闘いに行くつもりだ。後は頼む」と。「作戦を成功させたらそのまま自決するつもりだ」と言い直した。私が啞然として言葉が出なかったので、そう言い直して知らせた。これまで、彼ら同士の話の中で、去年からオリードやユセフ含めて話合ったりしていたという。「闘う以上、戦争であり、兵士として戦闘の成功のみを考える。敵を殺す以上、自分も命を終わらせるつもりだ」ときっぱりと言った。1月にオリードが亡くなってから、「オリードの分まで闘って死ぬから、ユセフお前帰国しろ」と笑顔で言っていたサラハやバーシムの様子からそういうことを言い出すのではないかと……と思っていた。連合赤軍事件の衝撃の後で「命」を語り合ってきた今、言わねば、とバーシムは思ったのだろう。



人を殺す戦闘については様々にすでに議論が飛び交っていた。パーシムは言った。「アブハニが言っていたな。『私はギリシア・オーソドックス（キリスト教のギリシア正教徒）出身だが、シオニストを利用し、パレスチナを奪った欧米のキリスト教徒の帝国主義植民地主義勢力といつも対決してきた。パレスチナのキリスト教徒はみんなそうだ。私は上辺だけの“博愛”や“人道主義”はとらない。パレスチナの人権はその“博愛”や“人道”で踏みにじられてきた。民間人を殺すことは極力避けて我々はこれまでも戦闘を担った。しかし殺戮のない戦闘は望ましいが無辜のパレスチナ人が殺され、人権を奪われている以上闘わざるをえないし、シオニストを殺さざるをえないのだ」と。パーシムが言いながら「人を殺すことに痛みを感じない人間なんて居ないだろう。でも闘わざるをえない抑圧されたパレスチナの側で義勇兵として闘うことは痛みを自分に課すことでもある」と語った。真剣に生きる。だから決死戦も生きることなのだ。

「殺したヤツの家族から見たら仇やで。おまえ耐えられるか?」「目開けてじっと見たるがな」「どこ見んねん」「んーん、水平線の向こうや」「ええかっこすな」「向こうしかないやろ……」とパーシム、サラールと折々に言葉を交わしたとユセフも記している。

のちにアブハニ部局の仲間たちが、パーシムたち日本人が、自分の親世代はナチスと同盟した日本軍で、朝鮮や中国を侵略した話をよくしていたと話していた。日本人戦士たちは、日本の帝国陸軍らが朝鮮人や中国人を虐殺し、言葉も姓名や文化も奪って日本の二級市民化したことに強い怒りと拒否感を示していたと。アブハニ部局の者たちは、パーシムたちにはシオニストのパレスチナ人に対するやり方はナチスのユダヤ人に対するやり方ばかりか、自分たちの親世代の侵略戦争の日本軍のやり方と重なっていたのだろうと話していたが、私自身もそう確信していた。

当時、仲間の誰もが、自身の体験の中に、アジアへの侵略と植民地政策で人々を苦しめた親世代の日本の責任を負うべき歴史の残骸に出会ってきた。ユセフが故郷の「花岡事件」を語ったように、私たちそれぞれが差別されている近所の朝鮮人の人々や同級生に同情し、憤慨しながら育ってきた。パーシムもその一人だった。また誰もが自らを犠

牲にしても抑圧された人々のために命を賭けたチェ・ゲバラへの共感があった。特にパーシムたちが好きだと言ったチェ・ゲバラの言葉がある。「2つ3つさらに多くのベトナムを！それが合言葉だ」「もし我々が空想家のようにと言われるならば、救いがたい理想主義者だと言われるならば、何千回でも答えよう。そのとおりだ、と」（1962年10月20日の「若き共産主義者はどうあるべきか」と題するチェ・ゲバラのスピーチより）科学や理性でわりきれない情熱の論理化された結晶のようにお互いに結び合っていた。

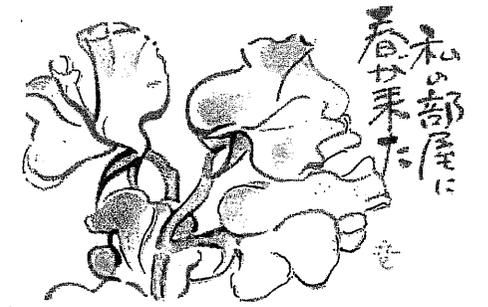
私は、闘いに参加することはもちろん賛成だった。当初赤軍派として来た目標の一つでもある。でも自ら命を捧げる決死作戦には反対だ。まず同志を失いたくないという素朴な感情がある。それに、パレスチナで学んできたのは、生き延びる、しぶとい闘い方であった。「連合赤軍事件」の衝撃のために焼け野原のようになる日本の変革への支援には、海外の闘いの広がり希望こそ必要だ。「連合赤軍事件」の害毒を闘いを通して自己批判して克服するのはこれからだ。パーシムが居て、軍をまだまだ育てなければならぬ。それを継続する人材にはパーシム、サラールが不可欠だ。もっと時間が必要だ。早過ぎる。私は言葉を尽くしてパーシムを説得したが、彼はサラールとすでに決断し、進行中の計画に忠実でありたいのだ、と私の希望を受け付けなかった。

私は考えた末にPFLP政治局宛に「意見書」を提出することに決めた。作戦の具体的なことは関知しないが、パーシムたち義勇兵が作戦で自決するのは反対であること、まだこれから共闘関係を作りつつある私の仲間たちが、そのような作戦に参加するには異議がある旨を書いて送った。ハバシュ議長宛だったが、数日してアウトサイドワークのアブハニが会議に出て来た。ちょうどペイルートに居て、私の意見書を読み、ぜひ理解してもらいたいと出席したのだという。アブハニの会議の始まりは「革命の名において会議を始めます」で始まる。アブハニは再びオリードの死を追悼し、お悔やみをまず述べた。そしてこれまでパレスチナ・アラブばかりか国際的な色々の人物と出会ったが、パーシムたち日本人、とりわけパーシムがもっとも素晴らしい人物の一人であると称賛した。そして「パーシムたちの自決は望んでいない」とはっきり述べて私をびっくりさせた。ア

ブハニは終始穏やかな口調で語った。PFLPは高度な戦術の作戦を準備中であり、ボランティア戦士としてパーシムたちが参加する予定である。闘いは苛烈であるが自決作戦を我々は望んでいないし、そのつもりもない。これまでもアウトサイドワークでは厳しく危険な作戦を担ってきた。その結果パトリック・アルグレロのように命を犠牲に捧げた戦士も居た。しかし自決はさせない。死と逮捕覚悟で戦闘し作戦後は投降はするが、そこから、我々は闘った者たちを生還させてきた。この原則は変わらない。そんなふうに話をしてくれた。チューリッヒ空港のエルアル機襲撃の生き残りだとパーシムが教官の一人について話していたのを思い出しながら話を聞いた。

そこで私は悟った。PFLPよりも私たちの仲間の意志が自決を求めているのだと。拷問によって自白したり、見苦しいことで闘った後にパレスチナの大義を損なってはならない。闘った者のけじめとして、闘う以上は「敵」を狙い、命を奪うことを余儀なくされる。誰も命を奪うことを欲している訳ではないが、戦争、戦場での闘いはそうなのだ。無辜の人々を巻き込まない闘いを目指し、それを祈るしかない。そうした闘いを志願している以上、自らも深く果てる道を選び取ろうとしているのだと悟った。アブハニの言葉に私は身体から血が引き、そのあと顔が熱く火照るのを感じた。ああ、アブハニの話はその通りなのだ。アブハニは彼らパーシムらの決意を引き止めている側に居るに違いなかった。それでも私は、闘いに成功し、生き残り、闘い続けてほしいという願いに変わらなかったが、闘う者の無私の志を認めざるを得ないと思った。

帰り道、海岸通りの地中海を見下ろす柵をまたいで、ピジョンロックを眺める岩場に一人降りて行った。そこかしこに春の菊、黄色・白の花が一面に咲き揃っていた。ところどころに、もうアドニスあのアネモネの真紅の花も咲きだしている。オリードが沈んでいたという海面あたりを見つめながら、どうしたらいいのだろう。同志を失う覚悟ができない。自らの命を失うにも等しい痛みだ。オリードが反対したのも同じ思いだろう。もっと生きて、パレスチナばかりか、日本やアジアの人々に届く闘いのことをオリードも考えていたのだろうか……。私は逡巡しながら彼らパーシムたちと交わした会話を反芻していた。でも、パーシムた



ちの闘いに最善の気持で連帯し共同したい。「パーシムたちの決断を尊重し、最善を尽くそう」そう私も覚悟を決めた。このアブハニとの会議について、後に私から話すと、パーシムとサラールは笑っていた。「頭ではなく、我々の足で立っているからこうなったんだ」とサラールは笑って言う。人が「拘泥」を捨てて一点を見つめて生きる時には、顔の表情にも眉をひそめたりするような影やしわが消えてしまう。何度かそういう表情の戦士たちをパレスチナ人の中でも後に見ることになる。パーシムとサラールは悟りきった達観したそんな笑い顔だった。その相貌は明るくてこちらが涙を落としてしまった。

この頃、72年3月15日、ヨルダンのフセイン国王が「連合王国構想」を発表した。「ほうら、ついに正体を現したぞ」とガッサン・カナファニーが言った。PFLPの週刊誌アルハダフでは大問題として論陣をはる特集を組むことにした。「連合王国構想」とはPLOを無視し、ヨルダン川西岸地区に住む占領下のパレスチナ人とヨルダン王制下の国民を統合して、ヨルダン王室の下に連合王国を作るという構想であった。これは米国の提案に呼応してパレスチナ人の代表権をフセイン王政が篡奪する企みである。それは一層パレスチナの存在意義を示す武装闘争による真実を示す機会と捉え、アブハニ部局は作戦の準備を急いだ。

3月下旬から4月、ジャカラダがうす紫色の花を咲かせる頃だった。アハマト岡本の訓練の合間にパーシムがペイルートのPFLPの館に滞在していた。岡本さんは軍事訓練所に入って以来アハマトというアラブ名で呼ばれていた。本格的なPFLPとの話し合いは最終段階に入っていた。その頃、4月中旬（記録によると1972年4月13日、日本出発）丸岡修さんがペイルートに着いた。ユセフが「作戦要員」として送り出したのである。パーシムは急ぎ丸岡さんを連れてパールベ

ック入りし、一般訓練から作戦準備に入ると言い、ベイルートを発った。すでにアハマト岡本の方は一般訓練を終えていたが、パーシムを慕い訓練所の生活が気に入って、ずっと共同する気であるらしい。パールベックのみんなの合宿所に残ると言っていた。

しばらくして、アルハダフのPFLP事務所ですべてのように働いていると、ガッサン・カナファーニ編集長から呼ばれた。「急ぎの用事で君の仲間のパーシムが君に会いたがっている。場所はパールベックへ行く街道の途中のPFLPの友人のやっている店。車が待っているから今から出かけて行っていい。今日はもう戻らなくていいから」と言われた。

アルハダフ事務所一の「プレイボーイ」とからかわれていたバツサムの車にイマドも乗って待っていた。「もう花畑だ。一番きれいな季節だなあ」郊外から山道に入ると草原の斜面は黄、赤、白、紫の花が咲き乱れている。待ち合わせた店は道端の小さな雑貨屋で、店の横のおどろ棚の下に低い椅子が並んでいる。すでに着いていたパーシムとサラハは日焼けした顔で手を挙げた。アラビックコーヒーが運ばれ三人で乾杯。イマドは店の奥に入って行った。アラビックコーヒーを飲みながら開口一番パーシムは「ユセフをやっぱり呼び戻そうと思う」と言った。「ニザールには帰国してもらってユセフと交代してもらおうつもりだ。ニザールを決死作戦に誘ったら“自分は今、日本で闘うために帰国する条件で来ている。日本人民のために命を捧げる覚悟はあっても、パレスチナのために、今自分は命を捧げる準備はできていないし、そのような話として、檜森から聞いていない”ときっぱり断られた。僕はニザールに詫言したよ。どうも食い違いがあった」とパーシムは話した。若いのに骨のあるやつだと、パーシムはニザールの素直さを高く買っていた。横からサラハが「ユセフの奴、自分が交代したいから、帰国の条件まで確認してニザールを送り出したんじゃないかなあ」と冗談のようにいつものサラハの語り口に笑いがあった。そうなの？もう私も「退路を断った闘い」を知っていたので聴いてしまった。「決死作戦はどうしても三人なの？一人ではダメなの？」パーシムもサラハも困った顔で大きく頷くので私も黙ってしまった。「それでユセフにその旨手紙を書くつもりだ。一緒に行動しているア

ハマト岡本が『僕がやりましょう』と言っているんだが……彼は朝鮮にいる兄貴たちへのコンタクトを担当してもらいたいと君が言いだしたわけだから、そのことも急いで伝えたいと思った。アブハニとの最終計画は4月下旬には決めるつもりでいる」と言う。

ユセフの再訪の時間、アハマトの志願、そしてPFLPのタイムスケジュールの中でどう考えるべきなのか。私はパーシムに言った。パーシムの指揮判断で、一番妥当と思われる決断をしてほしい。アハマトが作戦要請に応えるのなら、それは当人とパーシム、PFLPの間で決めてかまわないと思う。作戦の責任は指揮官のパーシムが負っているのだから、私はパーシムの決定に従うから、と伝えた。「じゃあ、こちらで決めさせてもらう」とパーシムが言って、重要な話は終わった。出されたアラブの甘い菓子と2杯目のアラビックコーヒーを飲みながら彼らは言う。休みの度にパレスチナの若者も交えてパレスチナの話や歴史の話をしているという。アハマトはとても元気で世界赤軍形成を兄たちと語り合ってきたという。大学ではノーベル賞級の研究もしていたと農学部の話をしてい嬉しい。「そういえばアハマトだけだな、ひげをはやしはじめたよ」とサラハが笑った。

その後のアブハニ部局との会議で、イスラエル側がベイルートの日本人水死事件の若者がイスラエルに入国した者たちであると気付くのは時間の問題だろう。もうそう考えている可能性があるというのがアブハニ部局の分析であったという。パーシムたちも時間を引き延ばしたくなかった。パーシムの要請にアハマト岡本が同意志願したことで、ユセフの交代は見送られてしまった。「パーシムがアハマトに『兄さんに会わせる約束を果たせなくて申し訳ない』と詫言していた。アハマトは、我々兄弟は世界赤軍兵士として闘いたかったのだから、武兄も喜ぶと思うと言っていた。豪胆なもんだなあ」とサラハが言っていた。彼ら、新たに加わった者含めて四人の戦士たちは訓練の合間に何度かパールベック神殿に行っている。ジュピター神殿の高い円柱の下に座り、またバツカス神殿の庭で寝ころびながら様々に語り合っていた。パーシムのよく知るプリータークの英雄譚やギリシア神話、子供の時から愛読してきた宮澤賢治の作品など、アハマトも知っていて、目を輝かせて語り合った。夜宿舎の空に、いつの間にか星が

またたくと、その星の数の多さに圧倒されるとサラハが最初の頃何度も語っていたが、アハマトもニザールもそう言っていた。戦士たちは空を仰ぎ、星座の世界を語り合った。あれが北斗、あれがオリオン座、我々は闘いの後には星になるのだろう。星になるなら、やはりあのオリオンの帯に揃った三戦士の誓いのような三つ星だろうと語り合ったという。「そう、我々は闘いを経て、ギリシアの神々のように、オリオンの三つ星になって地球の世界を永遠にみつめるだろう」「地獄で革命やるのはどないするんや」そんなふうに語り合っていた。

作戦の骨格が4月末に決まり、攻撃のフォーメーション訓練も決定された。彼ら四戦士たちは幾度も正確にイスラエル兵を狙い撃ちする訓練をくり返したという。アブハニは最後まで作戦後、つまり銃を撃ち尽くした後、投降するよう説得をくり返していたという。アハマトはパーシムからの通訳を受けながら、それこうなずいていたと思う、と作戦の後、アハマトが生き残ってから、アブハニはそう話していた。

こうしてニザールを含めた四人の戦士たちは朝霧の濃く煙る草原の日の出の頃には朝食を終えて、午前中密集したフォーメーションをくり返し、共に時を待った。すでにナクバの月、5月に入っていた。ナクバの日5月15日までにはすべての準備を完了すると言った通り、それらは実行された。パーシムの指示によると、ニザール丸岡が作戦が成功したことを確認して帰国すると、入れちがい

にユセフ檜森がパーシムに替わって、アラブの地でパーシム、サラハ安田の記した訓練ノートを引き継ぐことになっていた。

一方、PFLPの党内闘争も落ちついてきた。すでにこの3月、PFLPは党大会を開催し、党内闘争は終局を迎えていた。党大会で多数派形成ができなかったためか、指導部批判の「左派」は党大会ボイコットを訴えて独立組織「革命的パレスチナ解放人民戦線(RPFLP)」結成を宣言した。PFLP党大会は自らの主体形成の欠陥を自己批判的に総括して党形成をめざすと決議した。そしてハバシム議長、アブアリ議長代行らはレバノン南部に駐在するPFLPの戦士たちに大会の意義を説明しながら巻き返しを図っていた。パーシムたちも言っていたが、アブハニ部局の者たちは「今に見ている！敵イスラエルシオニストに対して闘う者たちだけが人民の支持を得るのだ」と、党内闘争でアブハニ部局が批判される中、黙々と作戦の準備を続けていた。(後略)

部分掲載している『戦士たちのリッダ闘争』(仮書名)は5月に幻冬舎から出版の予定です。

156号の誤植の訂正とお詫び	
10頁右列下から6,7行目	車窓より→車窓より流れる
12頁右列下から3行目	自由を→自由をと
13頁左列下から16行目	咲き誇って→咲き残って
最終頁左列上から4行目	地曳は。→地曳。
最終頁左列下から9行目	カードる→カードル
最終頁左列下から4行目	ては⇒とっては

■毎日新聞より■

うたの雫

それでも空を仰ぐ 加藤英彦

・独房に幻のごと流星雨降る夜なれば生きて祈る 重信房子
この流星雨は幻だろうか。生きては今もパレスチナで闘う同志への祈りか、戦禍に生きる子らを案じたか。あるいは重信に愛を告げて緊迫するアラブへと発ったフライ・ハイドを思ったか。独房もまた過酷で熾烈な環境ではある。
重信房子は日本赤軍の最高幹部であった。国際テロリストとしてハーグ事件への関与を問われ、懲役20年の刑を受けて今も服役中だ。右は獄中出版された歌集『ジャズミンを銃口に』にある。
・辻褄の合わない囚徒の人生を賣すことなく静かに聴きぬ
・辻褄のあう人生などはない。それは重信が痛いほど知っているだろう。大切なのは辻褄など考えず、そのときどきまで真剣に生きたかである。現在、重信はある短歌誌に獄中から毎号作品を発表している。右の一首はそこにある。
新しい秩序を創ろうとすれば、現実の秩序との衝突は避けられない。そしてその闘いに敗れたとき、人は現実の秩序によって裁かれる。社会の不完全性を目をつぶって生きる私たちに、そのどちらに正しさを見るかは難しい。問われるべき過去と向きあい、それでも熱く変革をねがう精神に私はある凛然とすら感じる。
・体液がどっと一気に流れ出す君の死知った五月の夜よ
・拷問で爆死で多くの朋を失った。獄中から仰ぐ空は小さいが、重信の胸に広がる空は遼い。今年5月、彼女は20年の刑期を終える。かとう・ひでこ「歌人」
||| 今回でおわります |||

連合赤軍事件、50年に想うこと

重信 房子

一、「オリーブの樹」156号11月30日日誌に記した通りです。正月に新党を結成しつつ個々の「弱さ」を責任追求する処罰による「共産主義化」は破産していきます。それでも純情な革命精神、革命家でありたいという思いは「総括」の混迷の中からおさま山荘において必死に権力に対峙して闘います。同時代の仲間たちを思うと、悼みと哀しみでいっぱいです。哀しみの極みは、連合赤軍事件の様々な犠牲が革命の財産になりきれしていないことです。

二、あの時代を、若い人々は理解し難いでしょう。教訓として語りえない程、「連赤」は闘う人々に衝撃をもたらしたこともまた事実です。68年・69年の10・21には、一日で1,500人を超える市民・学生が逮捕されていることに、あの時代が表現されています。記録によると、国立大75校中68校、公立大34校中18校、私立大270校中79校が、反戦、自治、学費や教育のあり方などの理由で立ち上がりバリケード・ストライキで闘っていました。抗議に対する強権と弾圧に対し、現状を突破すべく「武装闘争」が日本でも語られはじめます。

三、その先陣を切ったのが「党の武装」による「前段階蜂起」を主張する赤軍派でした。当時の私は、そして多くの仲間もチェ・ゲバラの呼びかけた「二つ三つ、更に多くのベトナムを！それが合言葉だ」に応え、世界を変える最良の方法として武装闘争を支持し参加しました。後知恵的に言えば「武装

闘争イコール銃や爆弾」ではなく、当時はむしろ非暴力・直接行動のゲリラ戦の多様な闘い方を人々と協力・共同して各地で起こす余地がありました。赤軍派の過ちは（ブントもそうでしたが）、社会革命の視座に欠け、革命を「権力奪取」に観念化し、軍事力学的攻防に一面化して武装闘争に突き進んだことです。人間が主体となる人々の幸せを実現するはずの革命プロセスを拾象していたと、パレスチナで暮らす中で強く思い至りました。

稚拙な赤軍派の闘いは、弾圧によって弱体化しましたが、それでも武装闘争のあり方もその路線も疑うことはありませんでした。何故ならそれが

赤軍派の結集軸であり党派性であったからです。闘いきれないのは「己の弱さ」や「日和見」と捉える傾向があり、決意や使命感や自己犠牲で乗り越えようと真摯に闘い続けました。私自身もまた武装闘争を「前提」としたまま、赤軍派の解体状況を克服したいと、革命の過渡にある第三世界と共に闘い学ぶつもりで、パレスチナに出発しました。やはり武装闘争を堅持して、日本の「武装闘争」路線が過ちと気付くのは、パレスチナの生存の武装闘争を共に担う中からです。

四、赤軍派の「何が何でも武装闘争」というあり方が森さんに引き継がれ、そこに連合赤軍結成の契機があったと思います。そのための毛派との出会いや事情に合わないやり方が失敗すると、処罰的傾向を森指導部が生んでいったと思います。困難になればなる程、権力との闘いを観念化し、内向きになり、身内の個々の弱い環を否定することが一大事となり、指導の側の権威・権力で抑え込み、その結果、組織は個に解体されていったと思います。赤軍派の欠陥から見える連合赤軍へのその継承を考えつつ、私自身も同時代の責任と反省を負っていると改めてこの50年を振り返ります。

連合赤軍の姿、組織、思想はまた、日本社会の縮図でもありました。上の者が言うことはおかしいと思っても忖度したり、自己を納得させて唯々諾々と従ってしまう組織のあり方。トップが過ち

を犯せば、善意の人々も歯止めのない事態を招く「日本の伝統的な文化」と化した「無責任なあり方」と共通しています。「革命家はまずヒューマニストでなければ」と、苦い経験の中から呻くように言ったアラブの友を思いつつ、人権を普遍的に捉える革命とその後の社会をこれからの時代の革命として捉えるようになりました。

五、私が連合赤軍事件50年目に望むことは、当事者たちも御遺族の方々も、もう十分に苦しみを背負い来たことを少しでも減じてほしいという願いでありまた、この50年目に御遺族の方々に謝罪してもらいたいという願いです。和解は出来なくて

も深く謝罪することは出来ると思います。私自身もまた、反省を実感しつつ、今も獄中に在る坂口弘さんが天寿を全うされること、また無期刑模範囚として今も収監されている吉野雅邦さんの釈放が実現されることを祈ります。

以上、感想と思いを記しました。(1月8日記)

(註) 連合赤軍の教訓などは、「日本赤軍私史」や「遠山美枝子さんへの手紙」に記しましたので、ここには省略します。また、群馬の上毛新聞や信越放送などからも、連合赤軍、あさま山荘50年の感想や質問への回答が求められましたが、以上のような文を大谷弁護士にお送りしました。

「七転八倒百姓記」を読みました。

重信 房子

とても感動的な本を読み終えました。「七転八倒百姓記」(菅野芳秀著・現代書館)です。山形の農家に生まれた著者、191cmの体格の人。大学に行く余裕のない高校3年の時、何気なく新聞をめくっていて「朝日新聞奨学生募集」という広告をみつけます。学費がほとんど免除され、衣食住も保障される！と。一から勉強し、両親に4年間自由にしてくれと説得して、新聞配達しながら勉強可能な農学部をめざし、68年明大農学部合格します。68～69年冬、明大も東大闘争などの学生運動さかんな中で、新聞配達業務と農学部(神奈川・生田)の往復3時間でほとんど活動に参加できなくても、当時の生田校舎の3分の1くらいが何らかの形で集会・デモに参加する政治の季節を自分も身近に感じていたと著者。

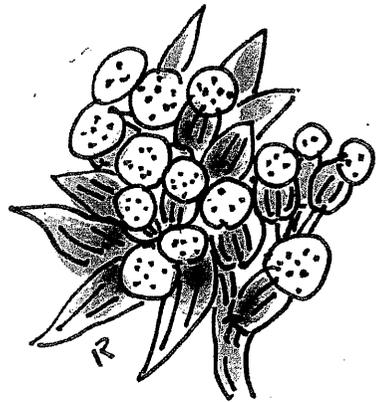
農学部の授業や実習も「やがて日本は大きなトラクターで大面積をこなす農業が主流になっていくという」授業を受け「村があつての農民の暮らし、農業はどうなるのか？農業政策の中に農業のための政策がない」。工業系の利益発展のために利用する視点の農業農村政策に疑問を持ちます。勉強、政治と新聞配達時間の調整がつかず、3年になると新聞販売店を辞めた。経済的見通しなく、学生寮に住み日雇い労働で稼ぎ勉強。当時の私の周りに居た学友たちの姿が浮かびつつ読み進めました。

そして成田闘争と出会う。農家の息子であるが故に強烈に国家の一方的なやり方に代々暮らす農

民の抵抗の姿をTVで見て、いたたまれず成田へ。それからまっしぐらに成田闘争のために、明治大と近所の玉川大、和光大と三大学三里共闘をつくり闘い、71年一坪共有地を守る砦を守り、3月6日逮捕起訴されます。80日間起訴拘留され、ずっと裁判闘争を闘い、74年から75年は労働団体の専従として沖繩で闘い、学ぶことに。

その中で「逃げ出したい現実を避けて、後ろ向きに生きていたらあとに続く子孫も逃げる。だから逃げずに希望をつなぐ。逃げ出さなくてもいいように足元の地域を良くしていく生き方が自分たちの役割だ」という人々の姿に出会う。この人々に比べて逃げ出そうとしてきた自分の生き方の軽さに突き当たったとこの時思い、涙が止めどもなく流れたと、著者は記しています。そして「26歳の春、私は一人の農民となった」と。

学生運動経験者のだれもが現実と理想の中で「利」と「義」の中で突き詰めて自分を見直し、道を選んで行った時代があった。私は学生運動の延長上に突き進んで、アラブの地の現実、人々の望む闘いの中で闘いつづけていたころ、日本の中では友人たちそれぞれの選択があり、苦闘したであろう友人たちが同時に頭に浮かびます。この著者が卓越しているのは、常に現実から自身と環境を対象化し、そして改善改革を理想やよりよいものと「利」を結びつけつつ一步一步「人々のもの」にとらえ直して世直しをしていく姿です。学生運動、全共闘運動の正義や理念を七転八倒しながら、



こんなふうに農民一人として出発し、家族ぐるみ村ぐるみ町ぐるみ市ぐるみへと築いた力には敬意と共に、共感と羨望と連帯が湧きつつ、感動してその後の著者の軌跡を読みました。

まず父母に認められ、故郷の農民に認められる農民になろうと頑張ります。そして「減反政策」に出会い、国ばかりか県、市、村に至る説得の中でも、稲を植えその農民の生命を奪うやり方に抵抗し、理を訴え挫折しつつ、理だけではダメだと教訓をつかんで次へと進めます。のちにその時の国の方針を貫いた市長が謝罪もしてくれて、著者を行政の場に推したのを後に知ります。

また殺虫剤のヘリコプター散布に反対し、農薬奨励のコメ検査のあり方にも疑問を呈して、明大時代のゆかりの多摩生協（現パルシステム生活協同組合連合会。ちなみに私が生協理事時代、生協法に抵触すると日共の反対と闘いつつ中村幸安さんが鶴川生協をつくっていたのだが、それが後の多摩生協になっていった）と連携し、「減農薬米」の実験田をつくり地域をあげて空中散布廃止を実現します。1986年のこと。

日本で先駆的に生協消費者と生産者の交流をつくり、地域山形県「置賜百姓交流会」をつくり、農民たちが担う社会運動を育てていきます。そこから学習を通して85年フィリピンでの国際会議への参加を初めとして、アジアの百姓とのつながり、お互いの実情と問題を学び助け合う動きが広がります。

ここではパルク（PARC）アジア太平洋資料センターとの共同でアジア連帯と国際交流へ。「ピ

ールズプラン21世紀」パルクらの企画の百姓国際交流を山形の置賜で百姓自身が中心になって実現し、市も行政も協力共同者に巻き込んでいきます。著者らの市民農民イゴシアチブが常に行政より先を見て、動員のあり方などすべての専門家やふさわしい方々に担ってもらいながら、地域のイゴシアチブが生かされていく姿が活写されています。こうして次々と多様性共生社会としての実績を積み上げ、消費者の生ゴミと生産者の土をむすぶ循環型社会へと挑戦し、市をあげて（長井市人口3万人余）「レインボープラン」として、自治体レベルでそれを実現する計画・準備・実行を成し遂げたのです。夢を実現するようなそのプロセスの入念な取り組み方に学びます。

どこからどのような団体とまず話し合っ進むのか？それらは日常の生活の中に答えがあるのを著者が見つける力を持っています。言いかえれば地域の人々が教えてくれるからです。こうして今は更にレインボープランを通して得た広がり「置賜自給圏構想」として描き続けています。日本の地域社会のポストコロナの人々の姿が描かれていて心躍ります。

学生運動の不十分な理念を「理」と「利」生活社会に晒され鍛えられ作り上げた軌跡が理念と共に記されていて、友人たちにも知ってもらいたいと思いつつ読みました。著者は明大土曜会にも参加したこともあり、和尚の友人でもあります。アラブ時代に異色の「置賜百姓交流会」の現場からの国際連帯に注目したことがありました。その後の発展を納得して学びました。

後記

重信さんの刑期もあと2か月で満期です。いろいろと学習されていますが、20年を超える塙の中の生活による歪みは、身体的にも社会的にも様々に蓄積されていることでしょう。高齢期にも入り、数度の開腹手術もありました。出るとすぐに新たな手術があるとのこと。彼女にとって、出獄とは、獄中で被ってきた様々の歪みを克服していく新しい闘いの始まりということでもあります。ひょっとしたら、外での生活は、獄中よりも戸惑いに満ちた、想定外の辛い闘いになるのかも知れません。

「重信房子さんを支える会」は、皆様に、この彼女の闘いを支える緊急カンパをお願い致します。どうぞよろしくご支援くださいますよう。同封します郵便振替伝票を使ってお送りいただけたら幸いです。

久しぶりに、今朝、表通りに出向きましたら、桜が満開でした。世界の平和を祈りました。（Y）

重信房子さんへの郵送アドレス 〒196-0035 東京都昭島市もくせいの杜2-1-9 重信房子

連絡先 〒105-0004 東京都港区新橋2-8-16 石田ビル5階

救援連絡センター気付 「重信房子さんを支える会」

郵便振替 00110-4-613941 オリーブの樹

頒布価格 500円

重信さんへの「闘病・生活再建」カンパの要請

重信さんは 20 年の刑期を終え、あと 2 か月で出所します (5 月 28 日)。

長期にわたる塙の中の生活の重圧が身体に加えてきた負荷は、ご本人の自覚以上に相当なものと想像されます。

しかし、こういった重圧の中でも、ご本人の弛みない学習意欲はきわめて旺盛であり、そのことはこれまで発行してきた「オリーブの樹」を読まれてきた皆さんがよくご存じのことと思います。激動する社会の動きに対し、傾聴すべき意見をこれまでも発信し、出所後もまた、何らかの形で貴重な分析・意見を発信していくことと思います。

しかし、身体的には既に 3 回の癌手術を行い、出所後、また新たな癌手術をしなければならない事態にあることが、直近の手紙でわかりました。現在、外部で信頼できる医療機関を探しているところ です。

これまで獄中の重信さんを、物心両面で支えて頂いた友人同志に再度お願いします。

今後の入院・闘病と住居の確保・生活再建のために相当額の資金が必要です。多くの心温まるカンパを、是非ともお願いいたします。

同封の「郵便振替」でお送り頂きたいと切にお願いします。